Extra 2 小説

アブラハムの幕舎

大原富枝 著

本文の要旨

田沢衿子と榊原保男とのお見合いの席で、母は次第に抑えようもなく饒舌になっていく。榊原の提案で小川の岩場に降りた二人だが、衿子はその小川の草いきれに少女時代に恋心を抱いていた少年と遊んだ思い出を強く感じる。岩場でのとりとめのない話の中で榊原は衿子の気持ちを測りかねていた。突然「結婚なんて、怖くて出来そうもありません」と衿子は榊原に詫びた。榊原は苦笑いをするしかなかった。そこには母に反抗する「心」を大切にする思いと、死んだ少年に対する衿子の思い出があった。

学習テーマ

この講では、小説の本格的な記述問題を扱う。**小説読解の基本は「客観的な読解」**だ。受験生の多くが主観的な読み方をしてしまい、勝手にストーリーを作り上げ、登場人物の心情を自分の都合の良いように曲解してしまう。当たり前の話だが、まず客観的な事実や人物関係を押さえた上で、ある心情に至る因果関係を正確に把握するようにしていってほしい。

次に記述答案の作成方法だが、まず**「下書き」**として、解答の根拠になりそうな本文を抜き出したものをざっとつなげて書いてみよう。その際、字数は気にせず、要素の抜けだけに気をつけて書けばいいので、やや長くなるのが普通だ。そのあと、制限字数や解答欄の大きさに合わせて削っていくという作業を経て最終的な「解答」を作成しよう。

今回は全問が記述なので大変とは思うが、**頑張って「下書き→本書き」という二段階の作業に取り組み、記述力を付けてほしい。**

問一 この部分だけでは判断しかねる問題だが、設問にも「文章全体から判断して」とあるので、先を読んでいく中で解答しよう。

青年（榊原保男）が何をしに田沢衿子の自宅を訪ねて来たのかも、最初の方を読むだけではよく分からないが、次の行の「先方」「本人たち」とあるところから次第に状況が見えてくる。訪ねてきた青年に対して、不断とはちがうしとやかな応対をする母、それに対して冷静な田沢衿子…そうした流れを読んで行くと、どうやら**この男女は「お見合い」をしている**と予想される。少し外でも歩きましょう、と提案する衿子の様子にもお見合いに対して「少々経験を積み過ぎた」様子が見て取れる。そして決定的なヒントとして、51～52行目に「結婚なんて、怖くて出来そうもありません」という言葉がある。

解答 （お）見合い

問二 問一で見たように、ここは「お見合い」の場面であるということに注意しよう。主役はお見合いをする田沢衿子と榊原保男の二人なので、衿子の母は傍線部にあるように「自分を抑えてしとやかな対応を」しようとした。しかし、傍線部②の直前に**「玄関にとび出していった」**とあるように、この母は考える前に身体が動いてしまうタイプの人間だとわかる。そして、しばらく控えめにと努力はしてみたものの、9行目で**「やがて抑えようもなく饒舌になってゆく」**と、抑えがきかなくなり普段の地が出てしまっている。この二か所が正解になる。

解答
玄関にとび出していった（十一字）
抑えようもなく饒舌になってゆく（十五字）

重要

問三 問二で見たように、母はお見合いだから自分が目立たないよう、「控え目にと努力している話しぶりをつづけて」いた。しかし、気が付くと不断通りの饒舌になってゆく。傍線部①の「もう少々経験を積みすぎた」や、傍線部③の手前の「以前はこんな場合」（10行目）などの表現から、以前にも母がこんなふうにおしゃべりになって出しゃばることがあったことがわかる。そして訪れるのが「突然激しい悔いの翳」。**それはまた今度も自分がしゃべりすぎて主役であるはずの二人に話をさせることができず、見合いを台無しにしてしまったのではないかと後悔に襲われる母の様子を表している。**

【下書き】 娘の見合いなのに、娘を差し置いて不断通りの饒舌になっている自分の姿に気がつき、主役であるはずの二人に話をさせることができず、肝心のお見合いを台無しにしてしまったのではないかと後悔したから。（九十四字）

解答
娘を差し置き不断の饒舌になっている自分の姿に気がつき、肝心のお見合いを台無しにしたかと思ったから。（四十九字）

配点

配点　6点
①娘を差し置き不断の饒舌になっている自分の姿に気がつき…3点
※「娘の見合いで自重すべき所が知らぬ間にまた饒舌になっており」も可
②肝心のお見合いを台無しにしたかと思った…3点
※「当の二人が話していないことに気づいた」も可。
※文末が「から・ので・ため」になっていないもの…マイナス1点

重要

問四 **「草いきれ」とは、夏に草の茂みが陽光に照らされて出す熱気のこと。**ちょっと青臭い鼻にむっとくるようなにおいを経験したことがあると思う。具体的な表現としては、**「里芋畑の葉の波の吐き出す青臭い呼吸」**（32行目）がぴったりくる。「濃厚な緑色の空気」（29行目）も「草いきれ」の一つの表現だが、少し抽象的過ぎることと、草がにおいを出しているというニュアンスがないので×。

解答
里芋畑の葉の波の吐き出す青臭い呼吸

重要

問五 里芋畑から立ちこめる草いきれと、急な坂になっている小径を後ろから追っていくというシチュエーションは、**田沢衿子に少女の頃の記憶を思い出させる役割**を果たしている。傍線部(5)に続くカッコの部分は、その回想のシーンに当たる。まざまざとよみがえるその思い出の内容を押さえる。

少女（衿子）は、猿猴（河童）が出て来るのではないかという気配に怯えながらも、必死で小径をかけ降りて少年を追う。おそらく少女（衿子）が少年に恋心を抱いていたからだと想像される。だからこそ、少女にとって恐怖の対象に襲われるのかもしれない危険を顧みず、急な坂を飛ぶように速くおりていく少年を追ったのだ。しかし、その少年はすでに死んでしまっている、せつない思い出。

解答としては、少女のころの衿子が少年を追って小径を駆け下りていったせつない思い出というのが中心となる。肉付けとしては、まず、少女が少年に恋心を抱いていたこと、そしてそのせつない思い出を甦らせたのが、あのときと同じ草いきれと急な坂の小径であったことだ。

【下書き】 自分がまだ少女だった頃、恋心を抱いていた少年の後を追って、急な坂になっている小径を飛ぶように速くおりていったせつない思い出が、むんむんとした草いきれとともに心の中に甦る時間。（八十七字）

解答 **少女のころ恋心を抱いていた少年を追って、懸命に急な坂の小径を駆け下りていったせつなさに満ちた思い出が、草いきれとともに心の中に甦る時間。（六十八字）**

配点

配点　8点

①少女のころ恋心を抱いていた少年…2点

②（少年を）追って、懸命に急な坂の小径を駆け下りていった…2点

③せつなさに満ちた思い出…2点

※「死んでしまった少年との思い出」も可。

④草いきれとともに心の中に甦る時間…2点

※「その場に戻ったかのような」「そのころにタイムスリップした」としたもの…1点

問六 「文章中に判断の根拠を求めて」とあるので、その指示に従って解いていこう。傍線部(6)の直後の「榊原は足をとめて待っていた」という表現から、田沢衿子が榊原に比べて、かなりゆっくりとした足取りだったことがわかる。それは、問五で見たように、草いきれに誘われて少女の頃の思い出に浸っていたからだ。田沢衿子はお見合いの相手である榊原保男の存在すらも忘れて、恋心を抱いていた今は亡き少年のことを思い出していたのである。**榊原からの視点**で考えると、物思いに気をとられている田沢衿子の様子ということになる。

解答 **一緒にいる榊原のことも忘れ、物思いに気をとられているかのように急な坂の小径をゆっくりと歩いている様子。**

配点

配点　6点

①（一緒にいる）榊原のことも忘れ…1点

②物思いに気をとられているかのように…3点

※「何かを考えている」「ぼうっとしている」なども可。

③（急な坂の）小径をゆっくりと歩いている様子…2点

問七　「後ろめたそうな」ということは、自分でも悪いなあと思うところがあって、気がとがめている様子を表している。榊原保男の「ちょいちょい帰るのですか、あなたは」という鋭い質問に対し、「いいえ、今度だって半年ぶりです」と答えるしかないように、**両親に対する不義理に対して後ろめたく感じている。**

解答としてはもう一歩踏み込んで、なぜ実家に帰らないのかを考えてみると、それは、結婚しないことにも原因があることがわかる。結婚もせず、両親にもなかなか顔を見せないことを悪いとは思っている。でも、どうしようもないのですという思いが、「後ろめたそうな笑い方」となって表れている。

解答　**結婚もせず実家にもなかなか帰らない娘として両親に罪悪感を覚えていたから。**

配点

配点　6点

①結婚もせず…1点

②実家にもなかなか帰らない娘…2点

※「田舎に両親を残してあまり帰らない」も可。

③（両親に）罪悪感を覚えていた…3点

※「自分でも悪いと思っていた」「気がとがめていた」「心配をかけてすまないと思っていた」など、「後ろめたそうな」を言い換えた表現があれば可。

※文末が「から・ので・ため」になっていないもの…マイナス1点

重要

問八　**「含むところがある」とは、不審や疑念・恨みなどを心に抱いているけれども、それを表立って言葉や表情には出さない様子のこと。**こうした榊原の気配はどこから生じたのかを問う問題だが、解答としては傍線部⑧の直前にあるように「母親の饒舌の傍らで、黙ってにこにこして座っていた」というのが直接的原因になっている。つまり、榊原保男としては、自宅で会うことを提案しながら、母親にだけしゃべらせてにこにこしている娘の態度が不思議なのは当然だ。一般的に、お見合いの場所として自宅を選ぶというのは、自分の実家をも、ちゃんと見てもらいたいという積極性のあらわれと解釈できる。一緒に外を歩く時も心ここにあらずでぼんやりしているし、「仕方なしに帰ってきたというわけですね」（45行目）のような榊原のネガティブな問いかけに否定する様子を少しも見せないあたりから、本当に結婚する気があるのだろうかという疑念が高まって、「どうしていままでしなかったんですかね？」（47行目）と訊いているように、衿子の曖昧な態度が不審を生じさせていることがわかる。

【下書き】 自宅で会うことを提案しながら、母親にだけしゃべらせて黙ってにこにこしている態度に加え、保男に対して真剣さを感じさせず、本当に結婚したいのかどうかわからない衿子自身の態度。（85字）

解答

自宅で会うことを提案しながら母の饒舌を止めず黙って笑っていたことに加え、真剣さが見られず本当に結婚したいのかどうかわからない衿子自身の態度。（七十字）

配点

配点　8点

①自宅で会うことを提案しながら…2点
※「自分のお見合いなのに」…1点
②母の饒舌を止めず黙って笑っていた…2点
③（見合いに対して）真剣さが見られず…2点
※「榊原の問いに対しても曖昧で」も可。
④本当に結婚したいのかどうかわからない衿子自身の態度…2点
※「衿子の態度（様子）」のないもの…マイナス1点

問九　「すみません」「はっきりお断りすれば一番よかったんですけど」「結婚なんて、怖くて出来そうもありません」とあるところから、婉曲的に結婚を断られている榊原だが、「母はお医者さんが好きなので

す」という一言で状況は決定的になる。**実は初めから結婚する気のない相手とお見合いをし、しかも納得のいかない理由を突きつけられてフラれる。**「ゼラチン質の皮膜のようなあいまいな霧」と比喩で表現されているのは、榊原がこの状況をどう受け止めて良いのかわからず、**動揺し困惑しているのだが、極力それを抑えようとしている様子**を表している。

解答

結婚する気がないという納得できない状況に直面し、その困惑を抑えようとする心理。（三十九字）

配点

配点　6点

①結婚する気がなかった…2点
※「結婚する気もない女性とお見合いをし」も可。
②納得できない状況（に直面し）…1点
③困惑…2点
※「動揺する」も可。
④抑えようとする心理…1点
※「見せまいとする心理」も可。

学習アドバイス

合格点は26点。小説としてはかなりの難問。合格点が低いだけに、**問一、二、四**で確実に得点しておきたい。お見合いにおける男女の心情を受験生に類推させるのはちょっと酷かもしれないが、センター試験でもこうした男女の心情の機微に触れる文章は出題されるので、慣れておくことが大切だ。

解答欄

問一 (お)見合い 3

問二 玄関にとび出していった 2
抑えようもなく饒舌になってゆく 2

問三 娘を差し置き不断の饒舌になっている自分の姿に気がつき、肝心のお見合いを台無しにしたかと思ったから。 6

問四 里芋畑の葉の波の吐き出す青臭い呼吸 3

問五 少女のころ恋心を抱いていた少年を追って、懸命に急な坂の小径を駆け下りていったせつなさに満ちた思い出が、草いきれとともに心の中に甦る時間。 8

合格点 26点

/50

問六 一緒にいる榊原のことも忘れ、物思いに気をとられているかのように急な坂の小径をゆっくりと歩いている様子。 6

問七 結婚もせず実家にもなかなか帰らない娘として両親に罪悪感を覚えていたから。 6

問八 自宅で会うことを提案しながら母の饒舌を止めず黙って笑っていたことに加え、真剣さが見られず本当に結婚したいのかどうかわからない衿子自身の態度。 8

問九 結婚する気がないという納得できない状況に直面し、その困惑を抑えようとする心理。 6